

伝書鳩

第10号

*井上ふみ追悼号

井上靖記念文化財団



挽歌

井上靖

あなたが亡くなってから五日目に、庭のくぬぎの最後の葉を落した風が吹きました。あなたが亡くなってから一カ月目に、小さい地震がありました。あなたが亡くなってから三十九日目に雪が降りました。その翌日も夜になって、また雪が落ちました。そしてその翌日は静かな冬の陽が一日中照り渡り、夕方には珍しいほ

ど赤い落日がありました。庭に敷かれている白いまだら雪の向うに、木立が黒々と見え、その黒い木立を透かして、火の粉をまきちらしたような夕映えの赤い空が見えました。縁側の籐椅子によってそれを見入っている時、私は初めてあなたがこの世にないことを信ずることができたのです。そしてその時初めて私は聞いたのです。喪に服している風景の中で、あなたのために鳴り続けている鐘の音を。

（『季節』より）



挽歌（詩） 井上靖……………2

ご挨拶 井上修一……………6

私の誕生日 井上ふみ……………7

弔辞 井上ふみさんのご逝去にあたって 大越幸夫……………8

鳩のおしらせ①……………15

一度きりのバードウォッチング 山崎隆芳……………16

井上ふみ夫人を憶う 敦煌への旅のお供をして 横川健……………22

井上靖未発表資料*1

後送途上（監修・解説 曾根博義）……………28

『きりん』の話 『きりん』が生まれたころ 浮田要三……………36

父の休息 家族の撮った写真から ③ 井上卓也……………42

私の備忘録より 浦城いくよ……………46

鳩のおしらせ②……………55

平成二十年度 事業報告 井上修一……………56

図書だより……………62

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子
奥付のカット 岩永 泉

ご挨拶

井上修一（井上靖記念文化財団理事長）

日頃から井上靖記念文化財団をご支援下さいまして誠に有り難うございます。ご存じのように、本財団の理事長をしております母、井上ふみは昨年（の十月十二日）に高齢のためなくなりました。満九十八歳でした。その折には、いろいろご丁寧なお心遣いをいただきました。誠に有り難うございました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

さて、私は今年の三月十三日の本財団理事会におきまして、母の後を継いで理事長職を拝命いたしました。経験も能力も不足しておりますが、全力で努めますので、なにとぞご支援、ご協力のほどをよろしくお願い申し上げます。

私に課せられました当面の仕事は、日常の業務を別に致しまして二つあるかと存じます。一つは、昨年の

十五回を持ちまして一区切りを付けました、井上靖記念文化賞の今後についてです。どのような形の復活が有り得るのか、皆様のお知恵を拝借させていただきたいと存じます。

もう一つは、本財団組織の将来のあり方についてです。政府は数年前より全国の法人改革を進めております。本財団も、特定財団法人にするか一般財団法人にするかの選択を、三年以内にしなければなりません。こちらの方もお知恵を拝借しながら、慎重に、無理のない選択をして行きたいと考えております。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

九月二十八日。

今日は私の誕生日。

と申しても結婚以来、誕生祝いをしたことはない。二、三日前に思い出している時もあるが、当日になると、たいてい忘れてしまっている。そして二、三日後になって思い出したり、またある時は、すっかり忘れてしまっていて、何かの拍子に思い出したりする。

自分でも忘れているのだから、靖は勿論、思い出もしない。と言うより、全く知っていない。家族の生年月日を書き込まなければならぬ時は、その都度、——ちょっと来てくれ、君の生年月日はいつだ——と、尋ねる。勿論、子供についても一人も知らない。

井上ふみ『風のおる道』より

弔辞 井上ふみさんのご逝去にあたって

大越幸夫（東京放送顧問）

きょうここにあなたの告別式に当って私は何よりも先に、長年公私にわたってお世話になったことに對する感謝の気持ちをお伝えし、ご冥福をお祈りいたします。そしてご遺族の皆様にも心からお悔みを申し上げるものであります。

井上ふみさんのご葬儀にまさか私が弔辞を述べることになるなどということは夢にも思っておりませんでした。ご遺族からご依頼を受けましたときも私のほかにもっと適した方がおられるのではないかと、固くご辞退申し上げたのでありますが、長男の修一さんから、母を知る最も古い人で母と最も多く食事を共にし、お酒やお茶を一緒にした方はあなたの他にはいない、弔辞をあなたにお願いするのは子供一同全員の一致した

希望である、母の告別式は、和やかな雰囲気の会にして明るく母を天国に送りたいというのが遺族一同の希望でもあると懇願され、やむなくお受けすることといたしました。従いまして、多数の先輩や知人をさしおいて大変僭越ではありますが私がお別れのことばを申し上げることになりました。お許しを頂きたいと存じます。

私が井上靖さんと奥様のふみさんと初めてお会いしましたのは一九四九年の暮れのことです。その時から六十年近い歳月が流れました。私は、就職、結婚、そして仕事の上でも何から何まで井上さんご夫妻にはお世話になったのであります。

とくに、ふみ夫人には、「あなたは井上家のもうひ

とりの息子のようなものだから、何の遠慮もなくやって下さい」といわれるほど目にかけて頂いたのであります。ふみ夫人のことを考えますと思ひ出はつきませんが、この六十年近いふみさんの思ひ出を三つの時期にわけてお話してみたいと思います。

その第一期は、一九四九年、井上靖さんが本格的な作家活動に入るため毎日新聞大阪本社から東京本社に異動され、東京大井森前町に居を構えて、それまで伊豆湯ヶ島の井上さんのご両親の家で生活されていた奥さまと四人のお子さん呼びよせて、新しい生活をスタートさせたところからのことであります。その年の秋、井上さんは雑誌『文學界』に「獵銃」、「闘牛」を相次いで発表され、翌年二月「闘牛」で芥川賞を受賞されることになりました。その後井上さんは次々と作品を発表され、作家としての地位を確立されていきました。一九五八年には「天平の甕」で芸術選奨文部大臣賞を、五九年には「氷壁」その他によって芸術院賞を、さらに六〇年には「敦煌」「楼蘭」で毎日芸術大賞を受賞されるなど、主な文学賞を次々と受賞されたので

あります。作家として不動の地位を築いたこの十数年が、その第一期であると私は思っています。

井上さんが大阪から東京の毎日新聞社に異動された一九四九年、当時私は早稲田大学の学生であり「学生アルバイト」の形で毎日新聞出版局で働いておりましたが、転勤されてきた井上さんが私の席の目の前にデスクを構えられたのであります。

井上さんは、作家活動が優先、会社の仕事は二次、出退勤は自由というのが会社公認の東京勤務でありましたから、社に顔を出されるのは週に一、二回程度でその留守の間の井上さん宛の手紙や書類の整理、連絡などは私の仕事の一つに加えられたのであります。芥川賞受賞後の井上さんはものすごく忙しくなり、出版社に渡す井上さんの作品を清書する仕事を手伝ってもらいたいと井上さんに依頼され、それがきっかけで私は井上家に出入りするようになったわけでありました。

昼間の毎日新聞社の仕事を終りますと私は急いで大井の井上さん宅に向かい、奥様が用意された夕食を井上さんと共にしたあと、私専用となった部屋に引き

あげ、井上さんがその日に書きあげられた原稿を夜の三時ごろまで「清書」し続けるというのが私の日常となりました。自宅にも殆ど帰らず、大学にも必要な時間以外は顔を出さず、井上家の「書生」のような生活となりましたが、当時のふみ夫人の生活はもっと大変なものでありました。

そのころ、長女の幾世さんは中学一年生、長男の修一さんは小学校三年生、次男の卓也さんは幼稚園、末の佳子さんは保育園と最も手のかかるときでした。ふみ夫人は朝一番に起き、お子さんたちの食事や身の回りの世話をし、それぞれを送り出したあと、井上さんと私のための食事の用意をする、夜は夜で同じようにお子さんたちの夕食を済ませたあと井上さんと私のための夕食づくり。当時井上さんは日本酒一辺倒でしたからお酒のお燗のおかわりだけでも手数のかかることでした。敗戦からまだ日も浅く、食料や生活物資もまだまだ不自由な時代でしたし、インフレの進行も家計には厳しく、私の知る限り井上家が最も貧乏な時代、奥さまにとって最もご苦勞の多かった時代であったと

れ転居されましたが、そのころから井上さんはそれまでの多作をやめ、「これからは自分が本当に書きたいものだけを書いてゆきます」という時代に入っていきます。

第二期は、井上さんが数々の文学賞などを受賞されたあと、ひとりの作家という枠から飛び出して、日本の文化発展にかかわる幾つかの団体や協会の役員につかれ、そのために活躍されるという時期であります。一九六九年には日本文芸家協合理事長、八一年には日本ペンクラブ会長、八四年には国際ペン東京大会の運営委員長をつとめられるなど「外」での仕事が多くなっている時期であります。中でも大変だったのが中島健蔵さん死去のあとを引きうけられた日本中国文化交流協会会長のお仕事でありました。井上さんが協会の会長に就任された一九八〇年のこの日中関係は以前とは違って好転してはいましたが、それだけに日中間の諸団体の往来は激しく、その応接にも多くの時間をあてなければならませんでした。井上さんご自身も中国へは会長就任以前の一九五七年の初訪中以降何回も

思います。それでもふみ夫人は歯をくいしばって、お子さんの養育と靖さんの仕事の成功のために頑張られたのであります。

私は一九五一年、東京放送、当時のラジオ東京への入社が決まり、井上さんのお仕事の手伝いは約二年で終ることになりましたが、井上家で家族の一員のようにならなければ消えてしまうのだ」とよく言われていた時代でもあり、ふみ夫人も後年その著書『やがて芽をふく』の中で、「このころは猛烈といっているほど忙しい時代だった」と書き記されているような時代でもありました。ふみ夫人は常にひかえ目な方でしたし口に出してグチをいうようなことはいっさいなく、私の陰の支えがなければ靖の仕事はうまくいくはずがないという強い思いの中で頑張られたのだと思います。生活や仕事は一年一年少しずつ軌道にのる中で、一九五七年春にはふみ夫人がひとり自分の足で歩いて探された世田谷馬事公苑近くの土地に現在のお家を建てら

訪問されていましたが、八〇年の会長就任以降は会長職としての責任や仕事も増え、中国訪問は毎年一回、二回と増え続け八八年の最後の訪中まで総計二十七回を数えるほどになりました。この間ふみ夫人も十五回程ご一緒されておりますが、訪中よりも中国からのお客さまを迎えることの方が大変でした。ホテルの宴会場でのパーティはともかく、ご自宅での代表団を迎える接待はしばしばのことであり、気を使う作業でもありました。しかし井上さんもふみ夫人もいつも丁寧な礼儀正しく外国からのお客さまをもてなされていたのであります。

また、こうした団体や協会の役員としての仕事の他にテレビや映画の仕事も次から次へとふえていきました。NHKの「シルクロード」ロケの同行、東宝映画「天平の甕」の中国ロケの現地参加、などの他、私自身も井上さんご夫妻をわずらわしてTBSの「おろしや国酔夢譚」のシベリヤロケの立ち会いをお願いしたこともありました。この他にもこの時期私は井上さんご夫妻のお伴をして、モスクワ、ベルリンなどへも旅

したことがあります、中でも忘れられないのは一九八二年井上さんご夫妻、武満徹さん、清岡卓行さんらとご一緒に日本中国文化交流協会代表団の一員として中国山東省済南市を訪れた一夜のことです。

井上さんは海外旅行の夜、フリータイムとなりますと、ご自分の部屋に同行のメンバーを集めて、歌声酒場を開くことが多かったのです。うたに先立って井上さんはまず「真向法」を披露されます。奥さまは旅行用の抹茶茶碗をいつも用意されていて、とらやの一口羊かんをお菓子にしてお茶を点てられ振るまわれるのであります。それらが一段落いたしますといよいよ歌声酒場の開幕となるわけですが、その夜武満徹さんが歌われた坂本九さんの「上を向いて歩こう」は誠に絶品でありました。音楽家だから当然ということもあるかもしれませんが九ちゃんの歌う歌とはまたひと味違う素晴らしいものでした。しかしその武満さんの歌にも優るとも劣ることなく素敵だったのは、ふみ夫人が歌った「琵琶湖周遊のうた」でありました。その声は少女が歌っているかの如く美しく、京都で育つ

たふみ夫人の思いのようなものがこめられているようでありました。ちなみにこの夜のことは同行の清岡卓行氏がその随筆の中で書かれています。

ふみ夫人はこの時期「エッセイスト」としても活躍され何冊かの著作も出版されていますが、一方であまり知られてはいませんが和歌づくりにも力を入れておられました。歌会始めの御題が発表されますと何作か歌をつくれ応募されましたが、入選されたことはありませんでした。井上靖さんは昭和天皇が亡くなられる前の年の一九八八年に歌会始めの召人をつとめられたことがありますが、私などはかげでふみ夫人の歌が入選し靖先生が召人をつとめられる歌会始めがみられたら、素晴らしい宮中参賀などと夢みただけであります。

この時代は井上さんご夫妻にとって団体関係の仕事や接待に追われて私生活をかなり犠牲にしなければならぬ時代でもありましたが、お二人がお互いに支えあい、労わりあい、円熟の度を深めた良い時代でもあったと思います。しかし井上靖さんは一九八六年に食

道ガンの手術を受けるなど体調を崩し、ふみ夫人の看病も空しく九一年一月、八十三歳で亡くなられるという悲しい時が訪れました。

第三期は井上靖さんが亡くなられたあと今日までの十七年余のおひとりの時代であります。

靖さんの死はその存在があまりにも大きかっただけに覚悟していたこととはいえ、その悲しみははかり知れないものがあつたと思います。とくにふみ夫人は靖さんの仕事をかけて支えることをひとつの生き甲斐とさえされてきただけに、ショックは深かったと思います。

しかしお子さんたちをはじめ関係者の励ましの中で、さらなる井上文学の継承と発展のために、また広く日本の文化の発展に尽力された方々を顕彰するために井上靖記念文化財団を立ち上げられ、その理事長としても活躍されました。靖さんの健康のために自宅の庭を畠にして始められた野菜づくりをその後も続けられ、頂戴した年賀状には「私は百歳まで生きます。今も野菜づくりをして元気です」と書かれていました。

ふみ夫人はつい先月の九月二十八日、九十八歳の誕生日を迎えられました。お子さん夫婦、お孫さん、曾孫さんたちに囲まれて元気に賑やかに誕生祝いをされたのであります。

しかしその数日後から体調が急変し、十月十二日ついに帰らぬ人となりました。お子さんやお孫さんに見守られての大往生であつたそうであります。

ふみ夫人は明治四十三年、世界的にも有名な解剖学者足立文太郎氏の長女として京都で生れ、初めから定められていたように井上靖さんと結婚し、その生涯を靖さんに捧げるようにして、九十八歳の生涯を閉じられました。明治、大正、昭和そして平成と激動の時代の中で、静かに、美しく、いつも微笑みをもって、すべての人に優しく生きてこられました。

井上靖さんの好きなことばに、「養之如春」これを養うや春の如しというのがありますが、ふみ夫人の生き方にびつたり通じるような氣もいたします。

ふみ夫人は私のことをいつも自分の息子のように優しい眼で見守って下さり、温かくして下さいました。

◎ 羽檣忌 あすなろき 井上靖追悼事業

平成二十二年一月三十一日（日）伊豆市天城温泉会館

十時～十一時 熊野山墓参

十一時～十二時 井上靖作品感想文コンクール発表・表彰式

十三時～十五時 講演（講師＝静岡県立がんセンター総長・山口建）

主催 伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会

共催 井上靖文学館

後援 伊豆市、静岡新聞社・静岡放送、伊豆日日新聞、井上靖記念文化財団

問合せ

伊豆市教育委員会生涯学習課

☎〇五五八―八三一五四七六（土曜日・日曜日休み）井上靖文学館

☎〇五五―九八六―一七七―（水曜日休館）

◎ 旭川市井上靖記念館行事予定

① 第四回企画展「井上靖が描いたヒロイン像」

（平成二十一年十月二十四日～二十二年一月十七日）

※井上靖の作品から、ヒロインとなった女性を取り上げその魅力に迫る。

② 第五回企画展「井上靖最後の長編小説『孔子』」

（仮称、平成二十二年一月二十三日～三月二十八日）

※井上靖最後の小説である『孔子』について、「孔子ノート」を紹介しながら井上靖の天命観を考察する。

二月中旬には第四回井上靖講座として、企画展の解説と関連する本の紹介を予定している。

③ 第三回文学講座（平成二十二年一月三十日）

講師＝伊藤一男氏（北海道教育大学旭川校教授）

④ おとなのためのおはなし会

（平成二十二年二月下旬予定）



1991年2月20日、青山斎場で行われた井上靖さんのお別れ会の開式前に、来賓の席を確認するふみ夫人と筆者。この写真は当日の東京新聞夕刊に掲載された。

感謝の気持ちでいっぱいでありました。本当にありがとうございました。
ございました。

どうか安らかに眠り下さい、さようなら。

付記——この文章は二〇〇八年十月十七日、東京都目黒区羅漢会館にて行われた、井上ふみさん告別式での弔辞原稿を、時間の都合により割愛せざるをえなかった部分も含めて掲載したものである。

一度きりのバードウォッチング

山崎隆芳（元・集英社社員）

世田谷区桜三丁目のお邸へうかがうと、大きな門柱に標札はなくて、かつてここに立派な標札があったという痕跡だけが残っている。標札はすぐ盗られ、その後、幾度新しく掲げても直ちに姿を消すので、今はもう標札はなくて成り行きにまかせているという。傍の小さなくぐり門を開けてもらい、玄関から応接間へ通される。

部屋に入ると左半分の壁面は天井までの書架が大型の書籍や膨大な史料で埋まっている。右は庭に面した窓を中心にコの字に腰丈の飾り棚になっており、正面窓下には河井寛次郎の壺が二箇対のように飾られていることが多かった。忘れ難いのは春先に飾られることが多い近藤悠三の梅染付の華麗な大きな花瓶であった。

と先生の八冊ある詩集のうち、半分の詩集の編集を担当した。一九八二年からは『すばる』に詩の連載をお願いし、その原稿をいただきに毎月世田谷のお邸に通うことになった。詩の連載は、途中、手術のための中断はあったが亡くなるまで続くことになった。

先生が日本ペンクラブの会長として、国際ペン東京大会を翌年にひかえ、大会運営の組織づくりや資金調達に多忙をきわめていた一九八三年の春先き、「春畫」の原稿をいただきに上った。実はその前夜おそくまで銀座にご一緒していたのであった。何時の間に詩が出来たのであろうと、電話をいただいて驚いた。

応接間に入ると、いつものとおりテーブルの上には、水、氷、ウイスキーがセットされていて、お手伝いのふきさんが奥へ取次いでくれる。待つほどもなく原稿を手にした先生が書斎から現われる。かなり険しい顔つきで、たった今まで推敲を重ねていたというふうである。坐って、ふっと表情をくずしまず一杯。口をしめし、眼鏡をかけ、やおら原稿を取り上げて、独得の淡々とした口調で朗読される。

四季折々に飾られる壁面の、梅原龍三郎をはじめとする諸家の絵画や、飾棚上の仏頭、ペルシャの青い大皿、棚の中の西アジアと思われる石鏤せきぎくなどの出土品……美術館では遠く眺めるばかりの名品に、ここでは秘かに触るよろこびがあった。

私は一九六五年に集英社で「日本文学全集」を企画し、井上先生にその編集委員をお願いしてから、逝去される一九九一年まで、二十五年にわたる御交誼をいただいた。

集英社文庫を創刊した時には、「白い牙」や「三ノ宮炎上」など、すでに他社に約束されていた作品をそれぞれの出版社に断ってまで出版させていただいた。また、詩集『遠征路』『乾河道』『傍観者』『星闌干』

日本の春の午刻ひる下がりの書斎はいい。その万物が息をひきとった静けさと、暗さの中に坐っている。

遠く、砂漠の一面で、三本の沙竜すなが立っている。沙あらしでもなければ、竜巻でもない。そんなま易しいものではない。突如、沙が暴戾極まりない竜の形をして、天空に舞い上がってゆくのだ。

沙竜などめったに見えるものではない。日本の明るい春の中に嵌め込まれた暗い書斎に於てだけ、沙竜を捉えることができる。部屋はどこかで、春畫しゅんがの護摩が焚かれているからだ。

〔春畫〕『乾河道』

前夜の酒が残っているのに、今また水割りのウイスキーを飲み、うっとりとして先生の朗読を聞く。何という贅沢！窓外のカエデの枝には、二羽のメジロが薄紅色の芽を啄んでいる。庭では、菜園の手入れに余

つ鳥の名を確認し、メモをとりながら夫人は飽くことなく望遠鏡にとりつき、夢中である。

先生のほうは、干潟の中に一列に並んで立っている棒杭の先に居る鳥を見る。目立つし、じっと止ったままであるし、探す手間もいらない。望遠鏡の中の鳥をしばらく見ていて、

「この鳥は何ですか」

「ウミネコです」

隣りの杭の上の鳥を見て、「この鳥は？」「ウミネコ……」しばらくしてまた「この鳥は？」「あ、それはオセグロカモメです」

「みんな同じ仲間ですね。怖いような顔だ。鋭い目、すごい嘴……ほんとに怖いような顔していますね。渡り鳥ですね」

「いえ、渡り鳥のほうはご覧になっている鳥の下、地面の泥地にいる嘴の長い、地味な茶色の鳥や、ちょろちょろ走り回っている……」説明しているうちに、はや先生は、カモメの方に戻ってしまう。とことんカモメを知り尽してやるというような作家の目である。



セイタカシギ (筆者画)

遠い旅立ちに立ち合わせて貰っていた。彼等も亦命を賭けた遠征に当って、この地区独特の、生ものの波立ちというか、上昇気流というか、そうしたものの飛翔、旋回が必要だったのだ。

〔新年有感―築地市場―〕『星関干』

井上先生にとって、この日の探鳥は、ウミネコ、オ

そして、先生の中ではカモメは渡り鳥なのである。

『海峡』の取材で一九五八年に下北半島の三月の海を渡るアカエリヒレアシギの群を見て以来、先生の中では、渡り鳥は生命のシンボルとして定着していったように思われる。沙漠の河の上を飛ぶ渡り鳥が幾つもの詩で詠まれている。

大手術で入院中の病室へお見舞にうかがった時に、先生は築地市場の朝、生命力あふれる市場の活気の模様と、その上空を渡り鳥の群が渡ってゆく様子を話された。「あの鳥は何だったのでしょうか」問われた私には見えないので分らない。その日窓外にユリカモメが飛んでいるのが見えた。

後年先生はこの市場の様子を詩に詠んでいる。

その日、恰も私の考えを支えてくれるかのように、その秋初めての渡り鳥の群れが、幾組も、次々に整然と隊列を組んで、築地市場の上空を旋回、それぞれ、北方へと姿を消して行った。

私は病室の窓際に立って、その可憐な生きものの、

オセグロカモメにつきるようであった。おしまいの頃は、鳥の先達でもある高野、杉村氏としきりに話し込まれていた。一方、ふみ夫人にとっては念願の一日で、少女のように鳥を楽しまれた。ことにセイタカシギの非常に長い紅い足、白い顔、優雅にゆったり腰をゆらして歩く、バードウォッチャーからマリリン・モンローと愛称をもらっている鳥が、大層気に入られたようであった。

夜、一同、世田谷のお邸へお招きいただいた。秋晴れの一日、ご夫妻とも本当に楽しそうに見受けられた。ことに夫人は、

「仕事もなく、夫婦そろって一日、ただ遊びのために遊んだのは、結婚してはじめて」と喜ばれた。

われわれは、酒のみ、大いに盛り上がったが、先生は盃に日本酒のお湯割りを一杯だけ。それでもう真赤なお顔だった。

井上ふみ夫人を憶う

敦煌への旅のお供をして

横川健（日本中国文化交流協会事務局）

井上靖先生は日本が誇る偉大な作家であり、私たち日本中国文化交流協会の関係者にとっては、敬愛する指導者でもありました。その井上先生を生涯にわたって支え続けたふみ夫人も、また私たちのよき理解者でした。私たちは、ふみ夫人を、親愛の情をこめて「おふみの方」と呼んでいました。

ふみ夫人は、井上先生の作品の舞台となった地を、先生とともに旅しています。そのようなお二人の中国への旅に、協会の事務局員として幾度かお供をさせていただきました。そのどれもが忘れがたいものでしたが、強く印象に残っているのはやはり敦煌への旅でした。

ご夫妻が敦煌を訪れたのは、一九七八年五月のこと

で、中国人民対外友好協会（当時、王炳南会長）の招きによるものでした。井上先生は、そのときの感慨を次のように述べています。

小説『敦煌』を発表したのは昭和三十四年であるから、いつかそれから二十年の歳月が経過している。その間、自分の小説の舞台になっている河西回廊地帯に実際に足を踏み入れてみたいと思っただけで、敦煌の莫高窟を自分自身の目に収めてみたいという気持ちも強かった。しかし、文字通りの中国の辺境ではあるし、よほど幸運に恵まれない限り、望んで果たしえないことだと思っていた。その望んで果たしえないことが、中国の好意によつ

て、思いがけず実現することができた。命なりけり」という言葉があるが、まさに命あったればこそである。

（『日中文化交流』一九七八年七月五日号）

当時、中国は「文化大革命」が終息したばかりで、社会も経済も疲弊していましたが、「四人組」の桎梏から解放された文化界の人々は、喜びに溢れ、文化の復興に取り組んでいました。そのような中で、井上ご夫妻の訪中は大歓迎を受けました。北京では夏衍先生（劇作家）、林林先生（詩人）、中日友好協会の孫平化先生、唐家璇先生らが盛大な宴会を催してくださいました。宴会というところ、ふみ夫人の和服姿を思い出しませんでした。私の記憶では、宴席にはいつも和服で出席されていました。ふみ夫人が着物姿で現れると、それだけで会場が和み、明るくなるのです。異国の旅での着替えは大変なことだと思うのですが、ふみ夫人は、和服をびしりと決め、身も心も引き締めてその場に臨むことで、中国の友人たちへの敬意と感謝の気持ちを表され

たのだと思います。ふみ夫人の和服姿は凜として美しく、私などは、日本人として誇らしく思ったものでした。敦煌で、常書鴻先生や地元政府の方々が開いてくださった歓迎宴会でも、ふみ夫人は和服をお召しでした。ゴビの沙漠に囲まれた西域のこの町に、和服姿の女性が立ったのは史上初めてのことでしょう。莫高窟の飛天たちがこのことを知ったら、きっと一目見たいと飛んできたのではないかと、飛天に囲まれたふみ夫人を想像したりもしました。

北京で二日間の休養と準備の時を過ごし、敦煌へと旅立ちました。今でこそ北京から飛行機で一気に敦煌まで行くことができますが、当時は、まず甘肅省の省都蘭州まで飛び、そこからは陸路敦煌へと向かいました。蘭州は、石油化学工業の都市ですが、漢の時代には武帝の若き將軍霍去病が匈奴を撃つため兵を留めた地であり、唐の玄奘がインドに向かう途次通ったという歴史の町でもあります。五月六日、井上先生はここで七十一歳の誕生日を迎えました。蘭州の皆さんが準備してくださったバースデー・ケーキに、はにかみな



メモをとる井上先生とカメラを握るふみ夫人。孫平化先生（左から4人目）と、瓜州の遺構にて（安西、5月9日）



パースデー・ケーキにナイフを入れる井上先生とふみ夫人（蘭州、1978年5月6日）

がらナイフを入れるお二人の笑顔が素敵でした。
蘭州から次の経由地酒泉までは、列車の旅となりました。午前零時過ぎ、上海から来てウルムチへ向かう列車に乗り込みました。北京から同行してくださった孫平化先生ら三人に、蘭州から甘肅省外事弁公室の責任者と女医さんが加わりました。早朝六時、列車は標高三千八百メートルの烏鞘嶺^{うしやうれい}を越え、河西回廊に入りました。そこで初めての車内食です。調理室の石炭の臭いが漂ってくるような食堂車でしたが、お二人はほんとうにおいしそうに食べていました。中国を旅すると、口に合わぬからと箸をつけなかったり、日本から食べ物を持ち込んだりする人も少なくありませんが、ご夫妻にはそうしたことはまったくありませんでした。特にふみ夫人は好奇心旺盛な方で、珍しい料理や食材が出てくると必ず質問をしました。この旅でも、甘肅省特産の藻の一種で「髮菜^{フアツァイ}」という珍しい食材を「発掘」されました。

列車は河西回廊を西へとひた走りに走って行きます。お二人はほとんど休まず、時折ノートをとりながら車

窓を眺めています。列車は井上先生の小説『敦煌』に出てくる町を次々通過して行きます。武威（涼州）は主人公趙行徳が西夏軍と回鶻^{ウイグル}人の部隊の闘いに巻き込まれた町、張掖（甘州）は回鶻王族の若い女に出会った場所、そして趙行徳が仏教に最初に関心を持つようになった酒泉（肅州）に、私たちが到着したのは夕方

の五時半を過ぎた頃でした。
翌日の酒泉から敦煌への道は、マイクロバス一台、ジープ五台を連ねての旅となりました。酒泉からはさらに、前日泊った招待所の所長さんとコックさんが一行に加わりました。途中、嘉峪関など遺跡に立ち寄り、烽火台や長城の残片を眺めながら、「老風口」と呼ばれる風の名所を通り抜け、九時間かけてその日の宿泊地となった安西に辿り着きました。ここは往時瓜州と呼ばれた都邑で、小説『敦煌』では趙行徳が經典の夏西語への翻訳に専心した場所です。次の日もドライブは続き、最終目的地である敦煌（沙州）に入ったのは、北京を出発して五日目の昼過ぎでした。

敦煌には五日間滞在しました。その間、敦煌研究の



玉門関の烽火台の下での野点。常書鴻先生（左から2人目）らと（5月12日）

第一人者である常書鴻先生直直の解説を受けながら莫高窟千仏洞の計五十六窟を巡りました。この時は、井上先生はメモを取ることに専念され、ふみ夫人がもっぱらカメラマンの役を務めておいででしたが、どこに行く時も、必ず井上先生とお揃いの大学ノートを丸めて片手に握り、並んでメモを取っている姿が印象的でした。莫高窟では、昼の休憩時間にお二人はよく千仏洞前の林道を散策されていました。ふみ夫人は草花を調べたり、地元の女性や子どもたちに気さくに、日本語で語りかけたりしていました。

敦煌に滞在中、一日を割いて、漢代の玉門関と陽関の遺跡を訪ねました。最初は玉門関だけの予定でしたが、井上先生の強い希望で両方行くことになったのです。大変な強行軍が予想されたため、中国側は随分とためらったようですが、実現のため万全の態勢を整えてくださいました。女医さん、コックさん、警備員、運転手の交代要員を含め総勢二十七名、ジープ六台を連ねての一大部隊が編成されました。「隊長」は、人民解放軍出身の敦煌県県長さん。何事にも臆さないふ

み夫人ですが、このような時でも絶対逡巡することはありません。その日はさすが、スラックス姿に、スカーフでしっかりと顔を覆い、その上に日よけの帽子を被るという出で立ちでした。凸凹道を四時間かけて玉門関に辿り着きました。昼は、少し離れた漢代の長城に連なる烽火台の下で弁当を広げました。ふみ夫人がお薄を点ててくださいました。なんとも贅沢な野点（のうで）でした。青空の下、そこは草木もなく、音もない世界でしたが、間違いなく漢の時代から続く時間と空間がありました。

玉門関から陽関まで直行した経験者がいないため、文字通り道なき道をするという難行苦行の行軍になりました。車列が縦になると後続車が埃をかぶるので、ゴビ沙漠を横一列に並んで走るのです。壮観でした。しかし、ある程度のスピードを出さないと車輪がめり込んでしまうので、車の揺れはひどいものでした。ゴム毬のように体が弾みます。ふみ夫人は、ジープの幌を固定する鉄棒に手ぬぐいを括り付け、それを吊り輪のように掴んで凌いでいました。ふみ夫人は著書『私

の夜間飛行』の中で、その時のことを「暴れ馬に乗り、地震の中をつつ走る、そんな思いでした」と表現しています。小さな体でしかも腰痛を持ち、苦しかったと思うのですが、よく耐えられ、ひとことも弱音を吐くことはありませんでした。

陽関に着くと、井上先生は休む間もなく、夕陽に染まるなどかな斜面を一人西へと歩いて行かれました。その姿はだんだん小さくなり、そのままゴビの沙漠に吸い込まれていくようでした。ふみ夫人が心配そうに見ています。私たちは井上先生の後を追いました。ふみ夫人が待つ丘の上の遺跡に戻ったのは一時間後でした。この日は十二時間四十分をかけ、二百二十キロ走りました。すっかり仲良しになった元戦車隊の若い運転手さんが、ふみ夫人を抱きかかえるようにしてジープから降ろしながら、「老太太真了不起。意志堅強」（老婦人はたいしたお人だ。意志が強い）と労いの言葉をかけてくれました。

この時、ふみ夫人は六十八歳でした。

後送途上 (草稿)

井上靖の妻・ふみの没後、長男・井上修一がその遺品を整理した際、未発表の日記・書簡・原稿、その他の資料がまとまって発見された。その中から日中戦争従軍時の日記が、『新潮』二〇〇九年十二月号に発表され話題となった。それ以外の資料もいろいろあるが、いずれも分量が少なく、発表の機会が得にくいので、新潮社版『井上靖全集』の編集を担当された日本大学教授、曾根博義氏の監修のもと、本誌にて順次掲載していくことにした。解説も同氏にお引き受けいただいた。

第一回目は、未発表の草稿「後送途上」である。四百字詰め原稿用紙（縦二五・七×二六・一センチメートル）に鉛筆で記され、分量は五枚弱。原文は旧漢字、旧仮名遣いだが、掲載にあたって漢字は新字体に直し、仮名遣いはそのままとした。明らかな誤字は特にことわらず訂正した。

後送途上

井上 靖

受持区域の線路を見廻るために外套の上に銃を担つて、駅の三人の兵隊たちが歇みかけの雪がまだ舞つてゐる戸外へ出て行くと、後の待合室は急にひっそりして、寒気が部屋の隅々から一斉に立ち上つて来るやうに思はれた。

岐部は土間の上に直かに敷いてあるアンペラの上に半身を起すと、今まで蒲団代りにかけてゐた外套を今度は肩から羽織つて一つ大きく身震ひすると、雪を一面へばりつけたなりで凍つてゐる北側の硝子窓に焦点のない眼を落したまゝ、後は木偶のやうに動かなかつた。

取憑かれる——この言葉は確かに現在の岐部には一番ぴつたりしてゐた。今朝からもう何度目かの事ではあつたが、岐部は又してもいつそ病院行きを変更して別れた部隊を追ひかけて行かうかといふ考へに新たに取憑かれ始めてゐるのだつた。例によつて一旦この考へが頭を擡げて来ると、他のことは一切考へられず、帰らうか帰るまいか、頭の中はたゞもうこの事だけが占領して終つて、寒さ、それから靴履きのまゝ胡座をかいてゐる無理な姿勢から来る足首の痛みさへも殆んど受付け余裕は

なくなつてゆくのだ。岐部の尖がれるだけ尖つた神経は全部右手の二本のかちかんだ指先に集つてゐた。その指先は軽く左の手首の上に載せられ、そこから一つ一つ突き刺すやうに微かに伝つて来る血液の波動を異状な過敏さで読み取つてゐるのである。たとへ少しでもいい条件が発見できたら、と言ふより自分の不安な気持への申し開きさへ見付かつたら岐部は今度こそはつきりと部隊へ帰る決心を決めて終はうと思ふのだ。

併し相変らず脈はお義理にも平静を保つてゐるとは言へなかつた。刻々と言つていゝ位ゐ、少くとも彼の神経が聞耳を立てるその度毎に、指先に伝へられてくる血液の波動は決まつて前の状態とは違つてゐた。時には至極く静常のやうに思へるのだが、次の瞬間はもうその静常さが却つて底に不気味さを押しかくした異様な静けさとしか受取れないのである。そしてちよつとでも斯うした疑ひが顔をのぞかせたが最後、脈搏はいち早くゼンマイでも切れた時計のやうに空虚な響きを指先に伝へ初め、それと同時に胸の鼓動までが急にざわざわと昂つてくるのである。宛らそれはやがて来たるべき発作を予感して警鐘でも乱打してゐるに似てゐた。

ことに一番不可ないことは指先のほんとい寸した触り具合で、水でも引くやうに脈搏が急に弱々しく感じられて来る瞬間のあることだつた。そんな時二本の指先は吾ながらあさましい程取り乱して、遠のいてゆく脈搏に追ひすがやうに、やたらに手首の上をあちこちと位置をかへた。それでも脈搏の捉まる時はよかつたが、時には逃げ出した脈搏は意地悪くそのまゝ行方を晦ますことがあつた。又そうした場合は違つて、至極く静常な時でもいきなり何の前触れなく脈搏が急に消えて終ふことも

あつた。いづれにせよ、そんな場合には反射的に胸の動悸が不気味に轟き渡り、発作の起る前のやうに心臓の周辺がかあつと熱つぽくなつて来るかと思ふと、それと同時に不気味な筋肉の硬直感が水泡でも上つてゆくやうに続々と全身を下から上へと突走るのであつた。

結果から言へばいい条件を探してゐると言ふよりも寧ろ悪い条件を掻き集めることに努めてゐるやうなものだつたが、岐部は何回もそれを繰返してゐた。脈搏の不整も動悸の乱れも結局は根も葉もない神経の悪戯に違ひないとは思ふのだが、いざとなるとその神経にひと堪まりもなく敗けて終ふのが落ちだつた。そのくせ岐部はあくまで部隊へ帰るべきか否か、その決裁を自分の肉体から引張り出さうとしてゐた。肉体への不安が募れば募るほど、一方すべてを根も葉もない神経の悪戯に決めて終ふ自嘲的な気持も強くなり、一思ひに一切を押し切つて別れた部隊を追はふといふ欲求も亦激しく彼の気持を揺すぶるのであつた。おまけに列車がくるまでに態度をはつきり決めておかねばならぬといふ気持が絶えず岐部を追ひ立てゝゐた。時には斯うした一閃に思ひつめる気持こそ何よりも病的な神経のさせる業ではないかと気付くこともあつたが、次の瞬間にはもうそんな気持はすつ飛んで、別れた妹尾や三池や長谷やその他の班の兵隊たちの眼が、自分の決心を今か今かとどこからか見守つてでもゐるやうな、そんな冷い気配を彼は背に感ずるのだ。

(3)

ゐるとは言へなかつた。刻々と言つていゝ位
 ゐ、少くとも彼の神経が聞耳を立てるその度
 毎に、指先に傳へられてくる血液の波動は決
 まつて前の状態とは違つてゐた。時には至極
 く静常のやうに思へる。静常が却つて
 底に異様な不気味さを押しかくした異様な静
 けさを受取れ^{ない}のである。そしてちよつとで
 も斯うした疑ひが顔をのぞかせたが最後、
 の瞬間はもうゼンマイでも切れた時計のやう
 に脈搏はいち早く空虚な響きをいかにも輕薄
 なる指先に傳へ初め、それと同時に胸の鼓
 動までが急にざわざわと昂つてくるのであ
 る。宛らそれはやかて来たるべき祭作を予感
 して警鐘でも亂打してゐるに似てゐた。
 ことに一番不可ないことは指先のほんと一
 寸した触り具合で、水でも引くやうに脈搏
 急に弱く感じられて来る瞬間のあること
 だった。そんな時二本の指先はあさましい程
 取り乱して、遠のいてゆく。吾ながら脈搏に追
 ひすがるやうに、やたらに手首の上をあちこ

解説

曾根博義

未発表の草稿「後送途上」は、ふみ夫人がまとめて手もとに置いていた日中戦争初期の従軍日記（『中国行軍日記』と題されて二〇〇九年十二月号の『新潮』に全文が翻刻、公表された）の内容と深くかわわっている。

昭和十二（一九三七）年十一月、中国河北省の石家荘の南、元氏に駐屯中だった新野中隊所屬の輜重兵特務兵井上靖は、北京郊外から始まった三〇〇キロ近くに及ぶ過酷な行軍のために、途中、下痢や発熱に苦しんだあげく、脚気の症状があらわれ、他の兵隊たちが略奪や決死隊に出かけたりするのを見送りながら、宿舎で一人で休んでいることが多くなっていた。元氏に初雪が降った十一月十九日、部隊が前線の順徳に向って発進の命を受けると、直ちに医務室に行って入院の許可をもらい、一人だけ部隊を離れ、後送のため元氏の駅で石家荘への列車を待つ。

説の中で一度は殺したのだが、二度目には自分を二つに分け、一人が死ぬのを確認したもう一人の自分に生き延びる道を選ばせたのである。

「後送途上」は、冒頭の数行をはじめ、「銃声」の書き出しと重なる部分が多く、岐部という主人公名も同じであることから、「銃声」の草稿の一部ではないかと推定される。岐部の心臓発作や神経上の闘いについては「後送途上」の方が詳しいが、岐部一人の肉体と神経の葛藤を追うだけでは堂々めぐりにしかならないので、そこでいったん筆を擱いたのであろう。

執筆時期に関しては、「後送途上」に使用されている原稿用紙が、昭和二十二年から二十三年にかけて雑誌『人間』の「新人小説」に応募された「闘牛」と「猟銃」の草稿（いずれも井上承也名、二十四年十二月号の『別冊文藝春秋』に掲載された「通夜の客」の草稿「狐火」の自筆部分、さらに二十五年六月から十月にかけて『文藝春秋』に連載された長篇「黯い潮」の原稿の一部などと一致するが、二十六年八月号の『文藝春秋』に発表された「玉碗記」の原稿とは異なる

この日の体験は、日記には事実が簡単に記されているだけだが、帰還後、戦中から戦後にかけて、井上靖の中で兵士としての自分のふがいなさや後ろめたさを伴った忘れ難い記憶として何度も反芻され、井上承也の名で発表された戦後最初の短篇「ある兵隊の死」（『世界の動き』昭和二十四年四月第一号）や芥川賞受賞後の「銃声」（『文藝春秋』二十六年一月号）などの作品の筆を執らせることになった。「ある兵隊の死」では、衝心脚気に悩まされ、部隊から逃亡を企てた小杉一等兵が、元氏の駅で自分の銃で自殺を図る。「銃声」では、脚気で後送の許可を受けた岐部一等兵が、部隊を離れて元氏の駅で汽車を待つ間、脚気から来る心臓発作に苦しみながら、病院行きを変更して別れた部隊のあとを追いかけようかと迷う。駅では他の部隊から脱走してきたらしい病兵の小島に会う。岐部は発作に苦しんだあげく、郷里の伊豆の自然を思い出し、部隊のことは忘れて汽車を待つのに対して、小島は黙ったまま汽車が来る前に自分の銃で自殺する。

つまり井上靖は、ふがいない兵士であった自分を小

ることから、昭和二十二年から二十五年の間と考えられる。これは「後送途上」が「銃声」の草稿の一部だったのではないかという先の推定と照応する。発表順や内容から考えて「銃声」が「ある兵隊の死」より後の作であることに間違いないとすれば、「後送途上」の執筆時期はさらに絞られて、昭和二十四年から二十五年にかけて、つまり、二十四年十月号の『文藝春秋』に「闘牛」を、同じく十二月号の同誌に「猟銃」を発表し、二十五年二月に芥川賞を受賞して戦後の文壇にデビューする前後だったということになる。

自分の戦争体験とは直接関係ない「闘牛」「猟銃」「通夜の客」「黯い潮」などで戦後の文学の華々しいスタートを切り、その後四十年間、戦争についてはほとんど書くことのなかった井上靖が、その蔭で、十年以上も前の自分の弱い兵士としての体験を思い出し、その問題について自分の中で何らかの決着をつけようとしていたことは注目に値する。「後送途上」は、「ある兵隊の死」や「銃声」とともに、あらためて読者にその問題を考えさせる貴重な資料だといえよう。

『きりん』の話

『きりん』が生まれたころ

浮田要三（現代美術作家）



児童詩誌『きりん』は一九四八年二月、大阪の尾崎書房より創刊された。当時、井上靖は毎日新聞大阪本社文化部副部長であり、『きりん』の創刊に深く関わった。『きりん』は大阪で一九六二年まで計一六六冊が刊行され、その後発行元を東京の理論社に移し、一九七一年に終刊となった。『きりん』は子どもが詩や綴り方を自由に投稿できる月刊誌であったが、加えて造型表現にも力点を置いており、「具体美術協会」の前衛的な画家たちの導きを受けた子どもたちの作品が、『きりん』の表紙を飾った。この表紙絵の選択を担当したのが浮田要三氏である。浮田氏は創刊に立ち会って以降、大阪での出版を終えるまでの約十四年間に、一貫して編集実務に携わった。その手記を『きりん』の絵本『（二〇〇八年七月、きりん友の会）に発表されたが、『きりん』創刊時のエピソードからは、作家デビュー前の井上靖が子どもの詩に強い関心と情熱をもっていたことがよくうかがえる。以下にその冒頭部分の抜粋を、浮田氏の許可を得て掲載させていただく。

（編集部）

一九四七年の秋ごろ、ボクは大阪の梅田界隈にあった尾崎書房に勤めることになりました。尾崎書房は親族三人でやっておられたごく小さな出版社で、店主の尾崎橘郎（きつろう）さんが文芸作家の志望であったことから、出版される仕事の内容はほとんど文芸関係の作品でありました。

入社する前には、学術的な内容の本づくりをされると聞いておりましたので、そのことにウエイトをかけておりましたボクの目標が、少しはやけてきたように思われて、どうしたものかと思案しておりましたところ、子どもの詩（投稿作品）をもって雑誌を手がけようという話のあることをまもなく知りました。当時のボクには全く経験のない事柄なので、よくわからないままに傍観していたというのが、偽らない状態でありました。ただ一九四七年の年の瀬がだいぶおしめまつたところ、尾崎書房からほど近い距離にあった毎日新聞大阪本社に勤めておられた井上靖さんが毎日のように夕刻、書房に立ち寄られて、幾らか寄せられていた子どもの詩の原稿に丹念に目を通して、かなり満足そう

な面持ちで帰って行かれる姿を、何度も目にした記憶はくっきりと残っております。

『きりん』の雑誌ができるまでに寄せられていた子どもの詩の大部分は、尾崎さんの故郷である愛媛県の上分小学校と妻鳥（めんどろ）小学校のものであったことも、じっくりとよみがえって参りました。そして、その二つの学校には、それぞれ素晴らしい詩の先生がおられました。上分小学校には、尾崎さんの文学仲間であられた篠原恒夫先生と弟さんであった篠原和昭先生、妻鳥小学校には、女学校を出て間もない東村鈴子先生がおられたのです。

ここでたいへん重要なのは、その早い時期に非常に質の高い子どもの詩を送っていただいたおかげで、以後『きりん』に掲げられた詩の内容が、どれも上分小学校や妻鳥小学校に伍することく質の高いものになったというところで、その基盤をつくっていただいたように思えて仕方ありません。

通巻百号になった『きりん』第九卷第十一号（一九五六年十一月）の巻頭に井上さんがこんなふうに書いて

ておられるのは、『きりん』にとつてとても意義深いことだと、ボクはずっと思つて参りました。「白石欣也君、どうしていますか。宗次恭子さんはどうしているでしょうか。白石さん、宗次さんというのは、そのころ、さかんにいい作品を送つてきて私たちをおどろかせていた小学校の生徒です。この十年間にわたしは多くの人に会っていますが、たいいていその人たちの名はわすれてしまいました。しかしいい詩を書いていた白石さんと宗次さんという未知の少年少女の名はわすれることができないからふしぎです。詩というものはこのようなものです」。この井上さんのコトバを思いおこすたびに、ボクの胸は熱くなります。

さて、その日も同じように井上さんが来られて、子どもの詩に目を通しながら、静かな調子でおっしゃいました。静かではありましたが、力強く、重々しく、聞く側にはずつしりとこたえたようにひびくコトバでした。たまたま、竹中郁先生もおられました。「大阪も、こんなふうには戦災で焼野原になってしまいました。大阪が、子どもの心は今までとおなじようにじかじかと光

そのの良し悪しを計る尺度も何もない有様でしたが、そのあたりの雰囲気から、これはまちがひなく素晴らしい人間の仕事であると、直感して知ることができました。

それから間もなく竹中先生が、「今まで書いてきたコトバ遊びの作詩は止めて、ここに寄せられてくる子どもの詩を選ぶことで、そのリアリティを自分の勉強の核として、これをライフワークと考えたい」と、これも強い口調でいわれたことが、ボクの脳裡からはなれません。以後、竹中先生は子どもの詩の講演がある毎に、ライフワークのことをきっぱりといい切っておられたのが、とても印象的でありました。

一九四七年、十二月に第一回目の編集会が尾崎書房の二階において開かれました。なんでもなかったようにも思われますが、今、改めて考えますと、『きりん』に携わってきた人間にとっては、とても歴史的な感慨深い時間でありました。監修者の竹中郁・井上靖の二人の詩人と、尾崎さん、今代さん、星さん。末席に浮田要三がおりました。世相は、まだ物資も充分で

つています。その美しい心をひき出して、美しい詩の雑誌を作りましょうや。きっと出来ますよ」。店主の尾崎さん、奥さんの今代さん、弟であられた星芳郎さん、そして浮田要三という尾崎書房の人間四人は、コトバではなんとも答えませんでした。態度では、はっきりと肯定していた様子でした。井上さんと並んで立つておられた竹中先生も少し緊張した表情で、大きく首をタテに振つておられたのを、その時と同じ感じでも今も思い起こすことができるのです。この時にこそ、『きりん』が生まれたといえると思います。とても、とても熱い時間でありました。

貧弱な尾崎書房の社屋が、その時は理想と希望でいっぱいにくらんで、なんとも頼もしい尾崎書房であったと、いいなくなる感じがいたしました。当時、井上さんは四十歳を少し過ぎておられたところで、子どものような無垢な美しさとはいえませんが、働きざかりの大人にあって、究極の美しさ、強さを漲らしておられました。子どもの書く詩が、無上に好きであつたのでしよう。その頃のボクは、子どもの詩のことも、

なかった時分で、編集会の間中にも、何回もの停電に見舞われました。けれども、それも面白い話の種として誰もグチつぱいことはいわれませんでした。気持ちには、子どもの詩のことで躍動しておりました。

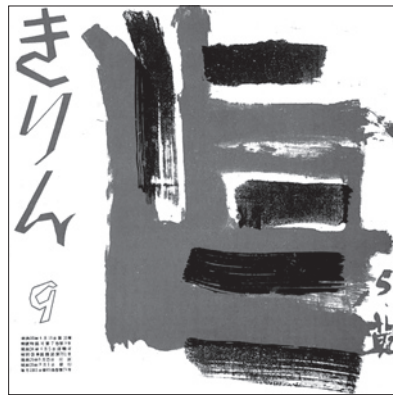
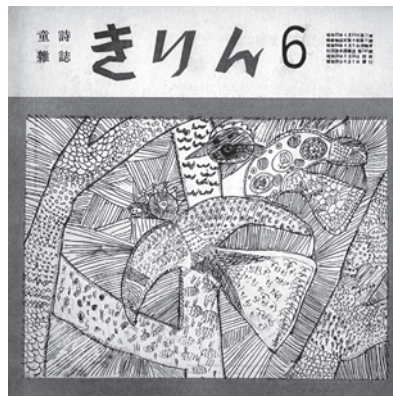
第一回目の編集会が行われる少し前、雑誌の命名の話ができました。はじめは「たんぼ」と名づけておられたのですが、すでに東京で同じ名前の雑誌があるというので、それはやめにして竹中先生が「きりん」と名づけられました。先生は机上にあった紙きれをさらに小さくちぎって、「きりん」と無雑作と思われる程手早く書かれて、ご自身で幾度もくり返して「きりん」「きりん」「きりん」と声に出されました。「何度、いうてもあきない響きや」と、そういわれて先生は得意満面でおられました。これも、すがすがしい時間でありました。

足立巻一さんが「ヒゲぼうぼうのさんばつ屋」の童話を携えて、井上さんと一緒に尾崎書房を訪ねて来られたのは、一号が発刊されて間もないころであつたと覚えております。細い目が、メガネの奥にあって、

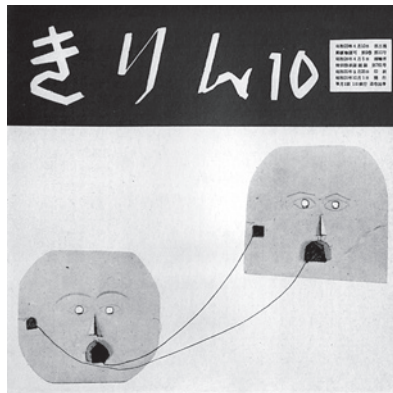
顔中いっぱい笑顔ではいつてられました。まだ、『きりん』とは浅い付き合いでありましたが、足立さんは『きりん』のことが無上に好きであったのでしょう。優しい独特の笑顔から、「ボクは『きりん』のことは全部知っているよ。」といわんばかりの状態でおられた印象は消えることはありません。きっと、尾崎書房に來られる前から、井上靖流の『きりん』の話を聞き解されて、大いにそれに同調されていたのに違いないと考えております。

坂本遼さんもほとんど同じころ、尾崎書房においてになったと覚えております。表情にあっては、足立さんと対照的でありました。寡黙な感じで、話されるコトバも、いちいち噛みしめるようにして、ゆっくりとまちがいないようにしゃべられるのが、とても頭に残っております。そして坂本さんのマナコが信頼感に溢れていたことも、忘れることはできません。

以上、四人の詩人の先生方が、それぞれ、子どもの詩のことをライフワークにするといった姿勢で、十五年間『きりん』を育んでくださいました。



掲載した表紙絵の作者と発行年月
 36頁 阪本正美（一九五一年八月）
 40頁右 吉原治良（一九四八年四月・五月）
 同左 山崎隆夫（一九四八年十一月）
 41頁右上 市田修二（一九四九年九月）
 同左上 大家敏子（一九五一年六月）
 同右中 藤原みさ子（一九五一年十一月）
 同左中 乾美地子（一九五四年九月）
 同右下 奥敦子（一九五六年十月）
 * 40頁の二枚以外は、すべて子どもの作品。



四十九年前から届いた葉書

井上卓也
(井上靖・次男)

二か月ほど前、父から僕に一枚の葉書が届いた。宛名は、「井上卓也様」とある。驚いた。父の生前、僕は父から、たった一通の手紙も葉書も、もらったことはないと思っていた。父の生前の暮らしぶりを描いた拙著にも「とうとう父から一枚の手紙も葉書ももらわなかった」と書いた。そう信じて疑わなかった。

父はモノ書きであったのに筆無精だった。それは事実である。よほどの長い旅でもしなければ、母でさえ、滅多に手紙を受け取ったことはなかった。

「便りが無いのは良い便り」という古い諺があるが、父の場合はその典型で、長い旅に出ても父は壮健だった。

この葉書、父の死後十八年、どうして今頃僕のとこ

ろに届いたのか。それは、母が生前、大切だと思うものを子供別にして、すべて整理していたからだ。

最近、何かの折に、世田谷の実家を訪れると、義姉の甫壬さんから「これは卓也さん宛です」と、紙袋を渡された。小学生時代に書いた作文のようなモノとか、古い写真だとかの間に、この葉書が挟まっていた。

「うーん、これは失敗。あんな事を書いてしまった」

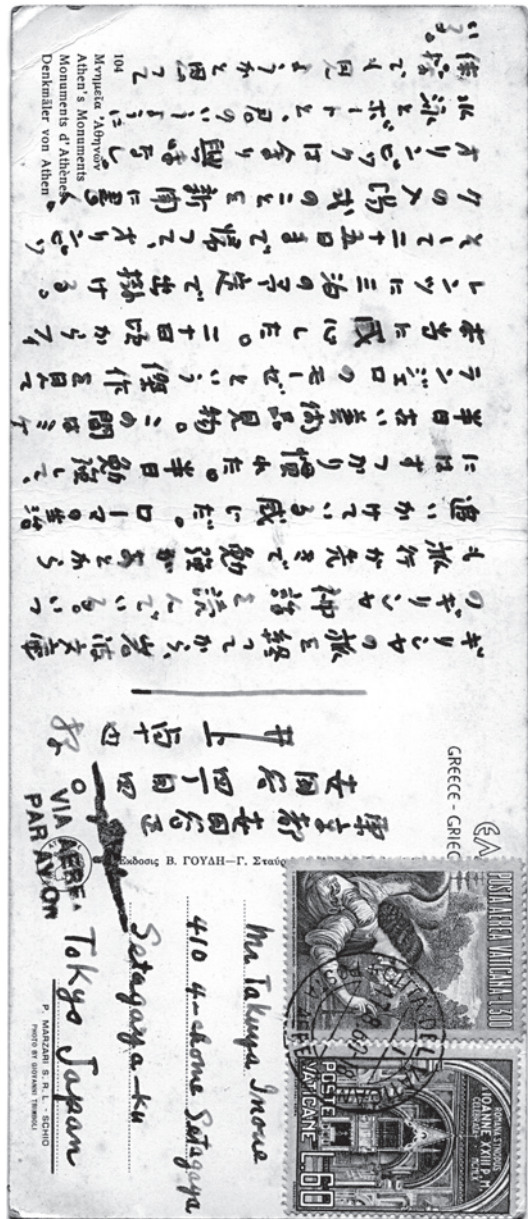
この葉書を手に取って、読む前に僕が感じたこと。生涯に恐らく、この一通だと思っけれど、ちゃんと井上卓也宛に葉書をもらっていたのだ。

さて、その葉書の中身をご紹介しますことにしよう。葉書はローマから出されている。受胎告知が描かれた美術品のように立派な切手に押された消印は、一九六

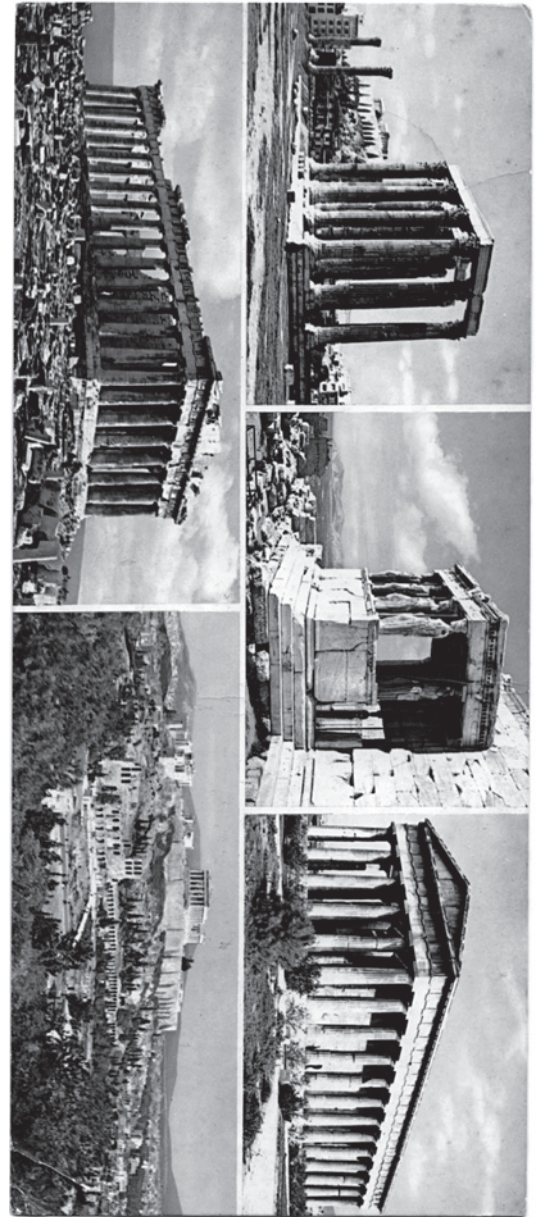
〇年、八月十七日となっている。

間違いなく、父が、毎日新聞より、ローマオリンピック特別特派員としてローマに派遣されていた時、四十九年前の夏だ。父五十三歳、僕十五歳。高校一年生。ローマでの生活が極めて簡潔に書かれている。ローマの暮らしに慣れたこと。半日、ギリシャ神話などの

ヨーロッパの古典を読み、半日は古い美術品見物とある。フィレンツェに、三泊の予定で小旅行すること。ローマに戻って、オリンピックの入場式取材して毎日新聞に書くこと……とローマでの生活と、これらの仕事の予定が書かれている。もっとも、父は売れっ子作家だったから、夜はたとえローマでも原稿書き



父からもらった（多分）最初で最後の葉書



葉書の裏面

に追われていたに違いなければ。確か、ローマでは父は未亡人の老婆が住むお屋敷に居候していたはずだ。帰国後、このお婆さんに、お風呂という言葉を教え込んだと笑いながら話していたのを憶えている。

さて、しかし、文末には驚く。父は毎日新聞から少くないギャラをもらって、ローマへ旅立ったはずだ

が、〃オリンピックは余り興味なし〃と素っ気なく書いていた。当時の毎日新聞の関係者がこれを知ったらさぞ嘆いたことであろう。それから、水泳とボートと、君のいうように体操でも見ようかと思っている〃で、葉書は終わっている。水泳は当時のスーパースター、日本中の期待を背負った山中毅選手がいたから

分る。ボートは当時の中年インテリたちが、旧制高校の対抗レースを懐かしむ心からのものであろう。しかし、体操はどうだ。〃君のいうように〃とあるから、僕が父の出発前さかんに、〃体操ニッポン〃をPRしたせいに違いない。鉄棒の遠藤幸雄選手とか、吊り輪の竹本正男選手とかを。

さて、僕も既に十五歳になっていたので、ローマオリンピックについては幾つかの思い出がある。まず第一に今でも思い出すのは、あの格調高いファンファーレだ。「古代ローマの森から聞こえてくる勇者たちの喚声」とかいふテーマで作られた曲だと記憶している。何本かのホルンが天空に向かって謳い上げる響きは壮麗だった。その格調の高さは東京オリンピックのファンファーレとは比べものにならない（失礼）。その後オリンピックのファンファーレは消えていったけれども何か残念だ。

それからもうひとつ。テレビ放送である。東京オリンピックの頃とは違い未だモノクロで、衛星放送開始には間があったので、すべて録画放送だった。NHK

の夜の七時のニュースが終了すると、七時半からローマオリンピックの時間となった。九時まで一時間半。前日か前々日の競技のダイジェストだったけれど、このファンファーレが鳴ると、史上初めてのオリンピックのテレビ放送だった。結果が分かっているにもかかわらず結構大騒ぎして見たものである。オリンピック中継を聞くためにラジオにかじりつく時代は終わろうとしていた。

さて、このファンファーレ、父もローマの空の下で聞いたであろう。聞いたに違いない。そして、この葉書は、四十九年振りに、古代ローマの森から、僕の耳に、あのファンファーレの響きを父の肉声と共に、届けてくれたのである。

なんとも嬉しい便りだ。

〃便りがあるのは良い便り〃

この連載、家庭内での父の暮らしぶりを撮った写真をテーマに書くことになっているのだが、今回は、こんな葉書が飛び込んできたので、連載の趣旨とは違いますが、お許しいただきたい。

私の 備忘録 より

浦城いくよ

平成二十年度



平成二十年度に私の関わった父井上靖および井上家に関する行事について報告いたします。

十月には母井上ふみが九十八歳で死去いたしました。結婚に際して父親である足立文太郎から「靖の書きたいという芽を育てなさい」と云われ、ずっと父に尽くした人でしたが、父亡き後八十代になってエッセイや短歌など六冊の本を出し、とても輝いた晩年でした。

平成二十年

四月二日

国際交流基金の中道氏を従弟の大谷正矩氏と一緒に訪ねる。オーストラリアに井上靖賞を作るときお世話になった方で、挨拶とその後の経過報告をする。

四月十二日

旭川市井上靖記念館の館報に「家庭の中の父と母」を書き終え投函する。

四月十九日

オーストラリアから帰国していた大谷正矩・百江夫妻がいよいよ翌日帰るの打ち合わせを兼ねて本年オーストラリアでのイベントに参加する卓也、弓子、昨年参加した佳子、大谷の長男正之君を我が家に招待して大谷夫妻を囲むスキ焼パーティーを開いた。気の置けない楽しい一夜だった。大谷夫妻もスキ焼を食べたのは日本滞在中今夜が初めてと喜んでくれた。

四月二十二日

「風林火山」松竹四月公演、日生劇場、十一時開演。

昨年のNHK大河ドラマで武田晴信役が好評だった市川亀治郎が晴信と山本勘助の二役を好演。他の日に家族がみなで観劇したが、その日は都合が悪く、私一人での観劇となった。

四月二十五日

今里隆建築作品写真展、吉井画廊にて。「日本 そしてその美しさ」。今里隆は日本を代表する建築家で八十歳。

ご案内をいただいたので伺った。日本の伝統的な建築の線の美しさには見とれてしまった。国技館、京都南座、大平正芳邸、料亭・金田中、平山郁夫美術館など、学生時代から多くの作品を作られた。

義父の今里広記さんは父靖と同年。いつ何処で知り合いになったのか存じ上げないが、本当に仲が良かった。父はいつも今里さん、今里さんと云っていた。お嬢さん（隆氏夫人）に何うと「父はいつも井上さん、井上さんでした」と云われた。

四月二十八日

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞授賞式と懇親会、東京会館ゴールドルームにて、十八時より。修一、甫壬、いく

よ出席。

金井裕氏がエミール・シオラン「カイエ」の翻訳で、渋谷豊氏がエマニユール・ボーヴ「ぼくのともだち」「きみのいもうと」の翻訳でそれぞれ受賞。

この事業設立当初より尽力された石井晴一氏は特別賞を受賞された。

一九八六年に日仏文化交流の一環として翻訳出版事業が小西国際交流財団のお世話で行われ、フランスのガリマール社より現代日本文学短編選集・詩選集の仏語版が翻訳出版された。

一九八七年五月、パリ・サントノレにある大使公邸で出版記念パーティが催された。ポンピドゥー・センターでシンポジウムも開催された。

私は両親の相伴でこの旅に同行した。その時石井晴一氏にはじめてお目にかかった。私の母校である青山学院の先生をしてもらったので大変親しみを持ったことと、大使公邸にあるマロニエの花が満開だったことが思い出される。

懇親会には小西龍作社長夫人も初めて出席され、ご新婚の頃お目にかかって以来久しぶりにお会いました。

五月十二日

井上靖研究会の会誌に「井上靖生誕百年の催し」と題した原稿を書き、編集担当の曾根博義氏にメールで送る。靖と関連のある全国各地で催された生誕百年の催しに私はほとんど参加したので曾根先生から頼まれて執筆した。後年何かのお役に立てばうれしい。

五月十五日

米子の井上靖記念館友の会会報『海鳴り』に井上靖関連の近況を書き、投函する。この会報は井上靖記念文化財団が協力という形で関与している。

五月十九日

日本中国文化交流協会歓迎会、ホテルニューオータニ・シリウスの間に、

十五時より。

中国出版代表团と文学芸術界代表団を歓迎。すでに退職されている佐藤純子、木村美智子、佐藤祥子さんも会に出席しておられたが何か淋しい。時代の流れを感じた。

七月二十日～二十一日

二十日、井上靖研究会、長野市ホテル信濃路にて、十四時より。甫壬、いくよ出席。

*研究発表

新井巴喜雄氏「風林火山の人物像」

*講演

笹森正樹氏「金剛坊宥盛と井上靖」

笹森氏の講演は井上家のルーツにまでさかのぼるお話だった。

*懇親会 同ホテルで行われた。

父は信州を舞台にした作品を十七編も書いている。

二十一日、九時にホテルを出発して研究会の方々と私は久しぶりに善光寺参

りをする。観光名所だけに大変な人出であった。すぐ隣にある信州美術館で

東山魁夷の過去最大の回顧展が開かれているのを見学。若い時のヨーロッパ留学時代の絵まで展示してあった。暑い中、土産物店が並んでいるメイン通りを皆でプラブラとお土産を探し、私は花梨の水あめを求める。蕎麦屋で昼食をとり、解散。今回の研究会は長野に住んでおられる新井巴喜雄さんがお世話下さった。

信濃電鉄にて私は軽井沢へ。

九月十一日

沼津市役所の林敬博氏より電話があり、国民文化祭の委員になって欲しいと依頼あり。

九月十二日

「横浜トリエンナーレ二〇〇八」オーピング。国際交流基金からの招待で恒雄、いくよ出席。

日本最大級の現代アートの国際展で三年ごとに開催され、当年は第三回目。

二十五ヶ国から七十三人のアーティストが参加している。テーマは「ときの裂け目」。会場は新港ピア、横浜赤レンガ倉庫、日本郵船海岸通り倉庫、三溪園。

第一線で活躍する現代アーティストの作品を一度に見ることができ、なかなか理解することはできなかったが素晴らしい体験であった。

レセプションは大桟橋ホールで開かれ、主催元である横浜市の中田宏市長などの挨拶があった。会場がかつてのウズベキスタン大使で参議院議員である中山恭子さんにお目にかかった。ウズベキスタンのアトラス模様の洋服を召しておられたことから、私どもはウズベキスタンへは二回も行っているのが話はずむ。後日著書『ウズベキスタンの桜』を送って下さった。

十月三日

「宮尾登美子展」オーピングレセプション、世田谷文学館にて、十八時より。

宮尾登美子氏は着物姿で来られていた。一貫して女性の生き方をテーマに作品を書かれていて、素晴らしい展覧会であった。帰宅早々本棚にあった『一弦の琴』や『鬼龍院花子の生涯』を手に取り読んだ。

十月五日

母九十八歳の誕生祝い。九月二十九日が誕生日だが今年は皆の都合が合わず一週間遅れとなった。土曜なので卓也、佳子、秀彦、甫壬、恒雄、私が集まり、母のいる居間で祝った。近所のケーキ屋さんに大きなケーキ注文して「98才おたんじょう日おめでとう」と母が読めるように大きな字で書いてもらったものを持っていく。母は夏がこたえたのか元気が余りなかったが、ショー

トケーキは一口、二口食べてくれた。

十月十一日

外出先に息子の義明から電話が入る。

「おばあちゃんが危篤。すぐに世田谷に来て」と云う。びっくりして恒雄と駆けつける。母は居間に置いてあるベッドに横たわっていた。息は荒かったが苦しそうでもなく、意識はもうなかったように思う。連休なので軽井沢や八ヶ岳へ行っている人たちに知らせる。孫たちも家族を連れて集まり、夜遅くまで母の枕元で過ごした。

十月十二日

午前中に井上へ。昨日よりは息がさらに弱くなっていた。午前中診察をして下さった医者のお話は今日は危ないとのこと。私は母のベッドの横に座って見守っていた。午後五時十三分、母は子供、孫、ひ孫たちに見守られて静かに旅立って行った。

十月十六日

通夜、羅漢会館にて、十八時～十九時。十四時自宅より式場へ出棺。著書『旬菜歳時記』『私の夜間飛行』や愛用していた孫の手などを入れた。金婚式に着た母のお気に入りの着物をかけてあげ、見送った。

お通夜には大勢の方が来られ、ご焼香をして下さった。沢山の花をお送りいただき、祭壇に飾られた。通夜振る舞いの席には最後まで大勢の方が居て下さり、色々な思い出話を聞かせて下さった。

十月十七日

葬儀、羅漢会館にて、十一時～十二時。お通夜を上回る大勢の方々が来て下さった。昔井上へ原稿を取りに来られていた出版社の懐かしい方々もおられた。桐ヶ谷斎場で荼毘に付した。その後羅漢会館に戻り、初七日法要を行った。母は人さまの気持ちの中に暖かくそし

て印象深く残っていることが、お通夜や初七日での皆様の会話やその後の署名入りの新聞記事を通してよく伝わってきた。

花々で囲まれし母に葉みかんを
供えてみるもなおも淋しき

十月二十二日

『伝書鳩』の最終原稿をメールで送る。書き始めたのは一カ月半も前なのに、母の死去もあり、遅くなってしまった。

十一月七日～九日

旭川市井上靖記念館へ。

七日、昼過ぎに旭川に着く。飛行場の外へ出ると風が強く冷たかったが、私は覚悟をして出掛けているので思ったよりも寒くなかった。当地の方々は「今日はとても寒い寒い」と云われていた。

「ナナカマドの会」の松田忠男会長の

ところへ荒川美智館長と一緒にご挨拶に伺う。珍しく会長はお時間があり、母ふみには何回もお会いになっているので晩年の様子などを聞かれ、お話しする。

会長からは「ナナカマドの赤い実のランプ」の碑ができるまでのお話を伺う。つづいて予算で大変お忙しい最中の西川将人市長にお会いした。前回お会いしたのは市長になられて二日目だった。今回は二度目。母へのお悔やみを述べられた。

一年ぶりの井上靖記念館では企画展として初版本の展示がされていた。靖の生涯やその時代背景と合わせて井上文学の世界が紹介されていた。

八日、前夜からの粉雪が今朝も降り続いている。記念館の館報や展示などを担当されている中西睿氏（四月着任）に初めてお目にかかる。

*文学講座

石本裕之氏「井上靖西域短編小説にお

ける詩と歴史」

講演後、しばらく館の日本間で父の旅行のことなどを石本氏とお話した。

夜は初代の館長だった表憲章氏、清水蓮雄氏、ナナカマドの会の役員の方々がいつも気を使って集まって下さり、楽しい夕食をする。表氏が今度副市長になられるというので、今まで親しくしていただけにびっくりしたが皆で応援する。

十一月二十四日

米子の井上靖記念館友の会会報『海鳴り』に井上靖関連の近況を書き投函する。

十一月三十日

母四十九日法要および納骨。前日は白壁荘に泊まる。

伊豆市雲金にある日蓮宗の妙本寺にて四十九日法要を行い、湯ヶ島の熊野山のお墓に納骨する。

お墓にはふると会の方々をはじめ、

母を知って下さっている湯ヶ島の方や井上家の家族を合わせて八十名余りの方がお参りして下さる。私の孫たちはお墓を開けての納骨に興味しんしんで周囲に座りこんで見ている。お墓の周りのゆずが豊作で、とてもおいしいとの評判。

昼の食事会には家族を入れて約五十名が参加。伊豆市の菊池豊市長さんも参加して下さり、色々とお話できた。

終了後は修善寺にある「虹の郷」へ寄ってライトアップされている紅葉を見る。大勢の人が訪れて混雑し、大賑わいだった。湯ヶ島からの帰路の皆の楽しみである沼津港にある「双葉寿司」にて夕食。父母をよくご存じの松村伸子さんもうれしいことに最後まで付き合って下さった。

十二月七日

世田谷文学館友の会創立十周年記念、

館長公開対談「井上靖と現代文学」。
菅野昭正氏と井上修一。甫壬、承子、恒雄、いくよ出席。

十二月十四日

井上靖研究会、國學院大學渋谷キャンパスにて、十四時より。甫壬、佳子、いくよ出席。

*研究発表

荻谷桃子氏「井上靖の歴史小説における想像の余白」
李哲権氏「井上文学における包むものと包まれるもの」

*懇親会 近くの居酒屋で。

平成二十一年

一月十八日

米子の井上靖記念館友の会の理事会・総会。二十年度事業報告および二十一年度事業計画。

*講演会

本間恵美子氏「出雲神話の中の女性た

ち」

女性の神様たちのお話でなかなか面白かった。本間先生はお正月なので着物姿でとても素敵だった。坂口總子会長夫妻に『海鳴り』の編集に力を注いでおられる上田幸子ご夫妻や野坂夫妻と夕食をご馳走になり、久しぶりの米子行きに話がはずんだ。

一月十九日

鳥取県日南町役場に矢田治美町長を訪ねる。七月には日南町で井上靖研究会が催されるのでその段取りをお願いしてくる。担当して下さる方を紹介される。会場や宿泊施設は全館借り切りにして下さる。飛行場までの迎えや送日も頑張ってお願ひした。

機上より見下ろす富士は五湖ひかえ

駿河湾背に白く輝く

（米子からの帰路）

一月二十四日

翌稽忌、伊豆市天城温泉会館。甫壬、卓也、佳子、恒雄、いくよ出席。

朝七時半に家を出発し、お墓に一番乗りして恒雄と瓊花に寒肥を与える。瓊花の木が丸く刈られているのを見てがっかり。この木は自然な形にしておくのが良いのでお願いしなくては。

十時、お墓参り。修一が欠席のため私が墓前で挨拶。

十一時、読書感想文コンクール発表・表彰式。毎年のことながら素晴らしい感想文が寄せられる。卓也が挨拶。本年は中学生の部では筑波大付属中学が、高校生の部では東京芸大付属音楽高校が多くの入選を占めた。筑波大付属中学では全生徒に『しろばんば』（一年生）、『夏草冬濤』（二年生）を読ませていると聞く。

午後から映画「あすなろ物語」を上映。久しぶりに見る白黒映画。久保明・久保賢の兄弟が出演しているのが懐かし

い。黒沢明が脚色をしていたのをはじめて知った。

「井上靖ふるさと会」の実行委員の方々が昼食に「しろばんば」のおぬい婆さんにちなんだライスカレーを沢山作って皆にご馳走して下さい。手作りの塩あんのおはぎも売られていてお土産に沢山買って帰った。

早朝にお墓に向かう東名に

真白き富士の右に左に

二月四日

早乙女貢氏偲ぶ会（平成二十年十二月二十三日逝去、八十二歳）、東京会館にて、十八時～二十時。甫壬、佳子、いくよ出席。

いつも着流しでオシャレな方だった。毎年お正月には紅白の梅の盆栽を父の元氣なところからご自身が亡くなるまで贈り続けて下さった。私たちは父亡き後も毎年梅の盆栽が応接間に置かれて

いるのを見てお正月らしい雰囲気を感じてきた。ご冥福をお祈りする。

二月十七日

大谷正矩・百江夫妻が母ふみの位牌への焼香に井上家へ来宅。母の甥で両親が仲人をした。三月にオーストラリアで行われる井上靖賞授賞式と「写真と詩展」の打ち合わせも兼ねて「うかいとうふ」へ夕食に出掛ける。正矩、百江、卓也、甫壬、佳子、裕之、恒雄、いくよ。

三月五日

小学館相談役相賀徹夫氏お別れの会（平成二十年十二月二十一日逝去、八十三歳）、帝国ホテル孔雀の間に、十一時より。修一、甫壬、佳子、いくよ出席。

井上家は父亡き後筆舌に尽し難いほどお世話になった方で、本当に有難うございました。前日までずっと雨だった

がこの日は素晴らしい晴天になった。

三月八日

オーストラリアで第三回井上靖賞授賞式と「写真と詩展」とフォーラムが行われることになっている。本年は私が参加することになっている。授賞式でのスピーチの原稿がやっと出来上がり、シドニーの大谷へメールで送る。

三月十三日

井上靖記念文化財団理事・評議委員会、山の上ホテルにて、十六時半～十七時半。

井上靖文化賞が幕を閉じ淋しく思う。会の終了後同じ会場で夕食を一緒にする。賞の対象が文化賞で良かったのか否か出席者のご意見を伺う。

三月十八日～二十三日

オーストラリアのシドニー行き、恒雄、いくよ。

十九日、朝シドニー着。まず大谷家へ。

午後から大谷正矩氏の案内で今回のイベントで大変お世話になった粗信仁総領事、北川一美副領事、小池若雄ジャパン・ファウンデーション・シドニー（国際交流基金）所長代行に挨拶に行く。

二十日、ジャパン・ファウンデーション多目的ホールにて。

*井上靖メモリアル・フォーラム「井上靖とシルクロード」十五時～十七時。シドニー大学中国研究科のリリー・リー先生が「中国から見たもの」、シドニー美術館の味岡千晶先生が「正倉院から見たもの」、シドニー大学日本研究科のクレアモント康子先生が「井上靖の小説にあるもの」と三つの観点から話をされた。

三十数年前に放映されたシルクロード紀行「敦煌」に「井上靖とシルクロード」が付け加えられて先日NHKで放映された番組を録画し、あらかじめシ

ドニーへ送っておいた。フォーラムの開始前に会場でその録画が放映された。

靖の敦煌での生き生きとした映像が流され、井上靖を知らない外国の方々に見ていただけてとても良かったと思う。

*井上靖賞の授賞式、十八時半より。受賞者はイアン・マッカーサー氏（シドニー大学、元メルボルンの新聞社の東京特派員、元共同通信社東京本部国際局勤務）。

論文「日本の法を語りに―明治期法改正論議にみる落語―」。明治二十年代末期ごろ、法律の改正論議が盛んであり、モーパッサンの「親殺し」を翻案した三遊亭円朝の噺「指物師名人長次」が知られているが、円朝の三遊派に属していたオーストラリア生まれの噺家、快樂亭ブラック（本名・ヘンリー・ジェイムズ・ブラック）も西洋の探偵小説を翻案してヨーロッパの訴訟手続きを紹介することで、明治期の法律改正論議に貢献した。ブラックの噺

と円朝の「指物師名人長次」の裁判手続さに関連することに焦点を当てながら、嘶家の明治期の法律改正論議への貢献を分析している。

選考委員の話では独創性と研究の深さが評価され、論文も読んでいて楽しいもので、井上靖の楽しく読める歴史物語に通じるものがある由。

父の名をもつ賞受けし蒙州の
研究者夫妻よろこぶ吾も

*「井上靖撮影シルクロード写真と詩展」三月十六日～三十一日、ジャバン・ファウンデーション・ギャラリーにて。

一九七三年、父六十六歳の時、オリエント学者の江上波夫氏や画家の平山郁夫氏らと一ヶ月にわたるアフガニスタン、イラン、トルコの旅をした。その時父が撮った写真が今回の写真展となった。今では想像もできない実にのど

かなアフガニスタンやイランの写真が展示されている。

井上靖賞授賞式に合わせて何かイベントをという依頼があり、考えた末にこの時の写真のネガを送った。三十数年前のもので保存もしっかりとはされておらず、きれいに伸ばせるかどうか甚だ心配であった。キャノン・オーストラリアの方々の大変な手数と努力で立派にデジタル修復された写真が展示され、クレアモント先生によって英訳されたシルクロードの詩が多数添えてあった。

贈呈式で私は、父のシルクロードへの思いと父の写真についてお話をした。

二十一日、大谷家にてパーティー。十二時から大谷家で今回のイベントでお世話になった方々を招いたパーティーが開かれた。受賞者のイアン・マッカーサー夫妻と令嬢ヒラリーさん、シドニー大学のエリーゼ・ティプトン夫

妻、クレアモント康子夫妻、私のスピーチを訳して下さったマット・カールソン夫妻、シドニー領事館の北川一美副領事、キャノン・オーストラリアの角田哲也夫妻が参加。

居間からはシドニー湾を正面に見下ろせ、この日は晴天でヨットの大会があるのかいろいろな色の帆を立てた沢山のヨットが浮かんでいた。素晴らしい景色を見ながらのゆったりとした和やかな楽しい会であった。お土産に靖のいろいろな種類の著書を若干持参し、机の上に並べて置いて皆様に好きなものを取っていただき大変喜ばれた。

三月二十六日

旭川市井上靖記念館相談役会議、クラブ関東にて、十二時～十四時半。荒川美智館長、高野昭氏、清水節男氏、い

くよ出席。
平成二十年度事業状況および平成二十一年度事業計画について館長より報告

鳩のおしらせ②

◎井上靖詩碑建立

平成二十一年二月、三重県熊野市木本町にある国指定名勝・鬼ヶ城おにがじょうに井上靖の詩碑が建立されました。

建立〓熊野市／協力・意匠〓竹本出海／協力〓井上修一

施工〓熊野那智黒石協同組合

昔熊野の鬼たちはここに集り棲んだ。彼等は風に髪を飛ばし渦を喰い夜はよもすがら岩を揺すぶる波濤の音の中に眠った。月明の夜より雷鳴の夜を好んだ。二本の角は稲妻の中で生き生きとした。

——鬼ヶ城にて——
井上靖

碑に刻まれたのは、井上靖が親友・竹本辰男氏に贈った詩です。竹本氏は昭和十八年五月から十二月まで毎日新聞社大阪本社に勤務しており、そこで井上靖とは隣り合わせの席でした。その後、竹本氏は毎日新聞社熊野通信社に帰りますが、井上は作家デビューした頃、状況、心情を書き記した手紙を竹本氏宛に送っており、その手紙は竹本氏の次女ゆき子さんが大切に保管されていました。

事業報告

井上修一（井上靖記念文化財団理事長）

平成二十年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）井上靖を記念する文化賞

文学、美術、歴史等の分野において貢献した人・団体を顕彰する「井上靖文化賞」は、平成十九年度の十五回を一区切りとして終了しました。今後については検討中です。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

「井上靖（奨学金）賞」は平成十八年にオーストラリアにおける日本文学の研究奨励のために、設立資金

五十万円をシドニー大学に寄付し、設立されたものです。奨学金支給対象者の選考もシドニー大学の井上靖（奨学金）賞選考委員会にお願いしてあります。

今年度はその第二回になりますが、シドニー大学のローマン・ローゼンバウム博士（論文“The Generation of the Burnt - Out Ruins”）に差し上げることになり、平成二十年六月六日、シドニー大学主催、国際交流基金ならびに本財団共催によりシドニー国際交流基金のホールにおいて授賞式が行われました。選考委員は早稲田大学ゲイ・ローリー教授、シドニー大学教授マツト・カールソン博士、ヒュー・クラーク教授でした。

また、第三回の奨学金支給対象者はイアン・マツカーサー博士（論文「日本の法を語りに——明治期法改

正論議にみる落語」）に決まり、平成二十一年三月二十

日、シドニー大学主催、国際交流基金ならびに本財団共催、オーストラリア日本領事館協力により、同じくシドニー国際交流基金のホールで、授賞式が行われました。今回は全六本の論文が審査され、選考委員は早稲田大学ゲイ・ローリー教授、ニュージーランドのオタゴ大学ロイ・スターズ教授、シドニー大学クレアモント康子博士でした。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」の管理をするともに、次のような事業を行いました。

平成二十年五月三十一日、『海鳴り』二十五号（米子・「アジア博物館」内「井上靖記念館友の会」会誌）が、本財団協賛で発行されました。

平成二十年六月一日、旭川市『井上靖記念館報』第八号が、本財団の協賛で発行されました。

平成二十年十二月二十五日、『海鳴り』二十六号が

本財団の協賛で発行されました。

平成二十一年三月十六日から三十一日、シドニー国際交流基金の展示会場にて、オーストラリア日本領事館ならびにシドニー大学、国際交流基金、本財団の共催で「井上靖撮影シルクロード写真と詩展」を開催しました。写真パネルの作成は味岡千晶博士を中心にキヤノン・オーストラリアが、詩・散文の英訳はクレアモント康子博士とレベッカ・スター博士がお引き受けくださいました。

（四）井上靖に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。特に前項（三）の事業を行うに当たり資料的側面を担当しました。

平成二十年十二月、「井上靖研究会」（國學院大學教授馬義澄会長）の機関誌『井上靖研究』刊行のため十万円の助成をいたしました。

平成二十一年三月、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館にも、資料収集用の資金として十万円

の助成をいたしました。

平成二十一年三月、井上靖の「しろばんば」を上演して十一年になる伊豆市の市民劇団「しろばんば」に、上演資金として五万円の助成をいたしました。

(五) 井上靖に関する講演などの開催

平成二十年六月六日、シドニー国際交流基金ホールでの第二回「井上靖（奨学金）賞」授賞式の折、井上卓也氏による講演（題「My father」）と井上靖原作映画「風林火山」（一九六九年、東宝）の上映がおこなわれました。

平成二十年七月二十日、井上靖研究会の夏季研究発表会が長野市の「ホテル信濃路」で行われ、本財団からも参加いたしました。新井巳喜雄氏の研究発表「『風林火山』の人物像」、笹森正樹氏の講演「金剛坊有盛と井上靖」が行われました。

平成二十一年十二月十四日、井上靖研究会の冬季研究発表会が國學院大學渋谷キャンパスで行われ、本財団からも参加いたしました。荻谷桃子氏（井上靖の

『歴史小説』における想像の余白」と李哲権氏（井上文学における包むものと包まれるもの）の研究発表が行われました。

平成二十一年一月二十四日、〓翠檜忌〓 井上靖追悼事業が、伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会主催、井上靖文学館（長泉町）共催、伊豆市、本財団等の後援で催されました。伊豆市湯ヶ島の墓地にて墓参会があり、引き続き「天城温泉会館」にて、井上靖作品読書感想文コンクール最優秀賞作品の発表と表彰、井上靖原作映画「あすなろ物語」（一九五五年、東宝）の上映が行われました。

平成二十一年三月二十日、シドニー国際交流基金ホールでの第三回「井上靖（奨学金）賞」授賞式の折、シドニー大学中国研究科リリー・リー教授、味岡千晶博士、クレアモント康子博士により「井上靖メモリアル・フォーラム」（井上靖とシルクロード）が行われました。

(六) その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係するいろいろな行事のご連絡をいただきました。

○旭川市井上靖記念館

平成二十年四月五日から六月八日、企画展「井上靖のふるさと」。

六月二十一日、文学講演、工藤正廣氏「井上靖の詩の世界」。

六月十四日から八月三十一日、企画展「草花が彩る井上文学」。

七月五日、文学散歩、講師・平野武弘氏。

十月十八日から一月十八日、企画展「井上靖の初版本展」。

十二月から一月（冬休み中）、「井上靖ナナカマドの会」の共催で「井上靖・童話の世界——塗り絵コンクール」。

平成二十一年一月二十四日、文学講座「戦後文学と井上靖」、講師・片山晴夫氏。

一月二十四日から三月二十九日、企画展「井上靖の紀行本」。

一月二十五日、「井上靖ナナカマドの会」主催「私の好きな井上靖作品を語る会」、講話・野上好氏。

三月二十九日、「井上靖ナナカマドの会」の共催で

「私の好きな井上靖作品を語る会」、講話・片山礼子氏。

○千葉県立薬園台高等学校二年G組

平成二十年九月十三・十四日、文化祭で井上靖原作

「風林火山」を上演。

○山梨県立文学館

平成二十一年一月二十日から三月二十九日、収蔵品展「自筆の世界」で井上靖の村松定孝宛書簡の展示。

○世田谷文学館

平成二十一年十二月七日、世田谷文学館、友の会共催、「友の会創立十周年記念 館長公開対談」で対談「井上靖と現代文学」（菅野昭正氏、井上修一）。

○藤枝市文学館

平成二十年十二月二十日から二月十五日、第十回企画展「文学と時代・井上靖——『しろばんば』の風景」。

○県立神奈川近代文学館

平成二十一年二月七日、小田原・鈴廣かまぼこの里・鈴の音ホールにて県立神奈川近代文学館ならびに財団法人神奈川文化振興会主催、小田原市教育委員会など後援の文芸朗読会「井上靖『敦煌』から」（朗読・久米明氏）。

(七) 役員

平成二十年十月十二日に亡くなりました前理事長井上ふみの後任に、平成二十一年三月十三日の理事会で常務理事の井上修一が理事長に、理事の浦城幾世氏が常務理事に選出され、同日より就任いたしました。

また本財団設立当初からご指導いただいております大岡信理事、平山郁夫理事、緑川亨評議員が平成二十一年三月三十一日付でご退任になりました。長年にわたり多大なご支援いただきましたこと、衷心より御礼申し上げます。

平成二十一年四月一日、平成二十年四月一日より評議員としてご指導いただいております小学館代表取

締役社長相賀昌宏氏ならびに井上卓也氏が理事にご就任くださいました。また平成二十一年四月一日より新しく浦城義明氏（株TBS）、大谷光敏氏（元三和銀行国際部部長）、狩野伸洋氏（勸一ツ橋綜合財団常務理事）、佐藤純子氏（日本中国文化交流協会代表理事）が評議員にご就任くださいました。厚く御礼申し上げます。

なお、平成二十年九月十二日付けで申請しておりました文化庁指導による寄附行為の変更が認められ、それまで三年間であった役員の任期が二年（平成二十一年四月一日より）になりました。

平成二十一年四月一日現在、本財団の理事、評議員は次の方々です。

理事長 井上修一

常務理事 浦城幾世

理事 井上卓也 相賀昌宏 岡野光喜 角川歴彦

黒井千次 佐藤隆信 高碕芳郎 野間佐和子

三木啓史 三好 徹 山口 建

監事 水谷大介

評議員 伊藤 暁 井上甫壬 浦城義明 大越幸夫

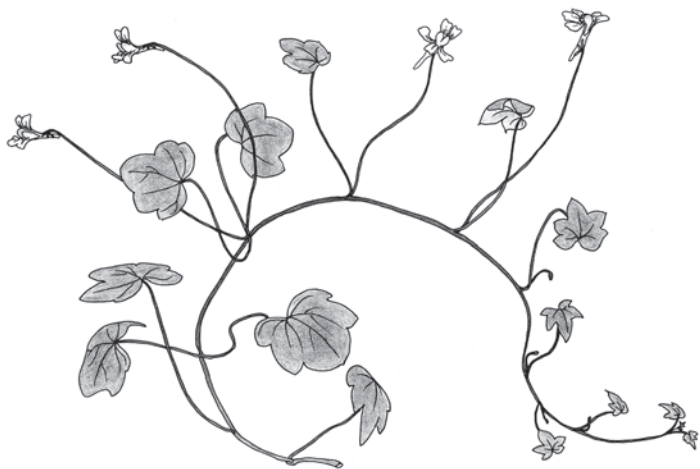
大谷光敏 大波加弘 狩野伸洋 黒田佳子

小西龍作 佐藤純子 篠 弘 曾根博義

高野 昭 (五十音順)

平成十九年三月三十一日まで理事をお勤めいただきました小学館相談役相賀徹夫氏が平成二十一年三月五日にご逝去されました。また平成二十一年三月三十一日まで評議員をお勤めいただきました元岩波書店相談役の緑川亨氏が平成二十一年七月二十日に、ご逝去になりました。

本財団の設立当初より多大なご尽力、ご指導をいただいておりますお二方に対して、心より感謝いたしますとともに深く哀悼の意を表させていただきます。



図書だより



平成二十年四月以降に発表された井上靖に関係する書籍、雑誌、論文などを紹介します。

【書籍】

- 嶋田しづ・遠藤幸一監修、高岡市美術館編『嶋田しづ展——第15回井上靖文化賞受賞記念・画業60年の歩み——高岡開町400年記念プレイベント・図録』二〇〇八年六月、高岡市美術館
- 伊吹和子『めぐり逢った作家たち——谷崎潤一郎・川端康成・井上靖・司馬遼太郎・有吉佐和子・水上勉』二〇〇九年四月、平凡社
- 三鬼宏『井上靖の詩の世界——生誕百年記念』（改訂版）二〇〇九年四月、文芸社

【雑誌】

- 『井上靖研究』第七号、二〇〇八年七月、井上靖研究会
- 『井上靖研究』第八号、二〇〇九年七月、井上靖研究会

【論文・記事】

- 菅聡子「〈よろめき〉と女性読者——丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって」『文学』
- 「特集Ⅱ戦後大衆文化と文学——昭和三〇年代をよむ」二〇〇八年三・四月
- 藤澤全「井上靖『北の海』（『国文学 解釈と鑑賞』「特集Ⅱ金沢と近代文学」二〇〇八年十一月）

- 顧偉良「井上靖——柔道の青春像をめぐって」（『国文学 解釈と鑑賞』「特集Ⅱ金沢と近代文学」二〇〇八年十一月）

- 山田哲久「井上靖「姨捨」論——〈棄老譚〉からの飛躍」（『同志社国文学』二〇〇八年十二月）

- 岩崎陽子「共食と共感——井上靖『しろばんば』より」（『文芸学研究』二〇〇九年）

- 山田哲久「井上靖「漆胡樽」論——〈歴史〉への態度」（『同志社国文学』二〇〇九年三月）

- 井上靖「新発見 井上靖 中国行軍日記」〔含解説〕（『新潮』二〇〇九年十二月）



編集後記

祖母井上ふみの追悼号が出来上がりました。

今号から連載を開始した祖父の未発表資料は、祖母の手によって個人的に保管されていたものです。赤鉛筆で「大事」と書いてある箱の中の、これまた赤鉛筆で「大事」と書いてある大きな茶封筒の中にありました。祖母のエッセイには、祖父が生前多くの手紙や資料を焼かされたことが書かれています。また祖父の亡き後、ほとんどの資料が文学館に預けられました。

燃やされず、誰の手にも渡されず、「大事」に箱にしまわれた資料は、祖父母の若い頃のものばかり。祖母にとってこれほど特別な品々にはどんな思い出があるのでしょうか。曾根博義先生にご協力いただき、一つ一つ掲載していくことに致します。

心温かい文章をお寄せくださった執筆者の方々、今号でも引き続き校正をしてくださった小山乃り子さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

西村承子



伝書鳩 第10号 *井上ふみ追悼号

発行 二〇〇九年十二月二十一日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 (株)厚德社

発行所 (財)井上靖記念文化財団